
北国のプリマ

あすかK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北国のプリマ

【Nコード】

N8908X

【作者名】

あすかK

【あらすじ】

その世界は、四つの国に支配されていた。北国ラウグリア帝国は、皇室の治める国でありながら、ここ十数年戦が絶えず、軍人のはびこる軍国になりつつあった。東国との戦に勝利しその国土を占領し、西国との戦もますます激しさを増していく。そんな北国ラウグリアに生まれた、愛を知らない歌姫と、謎の多い女誑し准尉の物語。

序、生誕

人の住まう世界は、四つの国に支配されていた。ヤンム帝国、エウリア君主国、アズニー共和国、ラウグリア帝国の四力国である。四つの国はそれぞれ位置している方角により、東国、西国、南国、北国と呼ばれた。少女は東西南北の四力国のうち、最も北に位置する最も寒い国土にて、生まれた。

少女の父親は線の細い音楽家であった。庭を通り抜ける風、野良猫の欠伸、暖炉の火、氷柱から滴る水、ありとあらゆる音をこよなく愛し、自らも美しい旋律を生み出した。彼の作った曲は世界へ浸透するほどの勢いはなくとも、小さな劇場などに緩やかに根付いていた。誰を脅かすこともない優しい広まり方は、彼の作る音とも彼自身とも酷似していた。

それとは対照的なほどに、少女の母親は華々しい踊り子であった。舞台の上で光を浴びれば、鑑賞にきた客の目を引き決して離さない。彼女自身の生き様もその踊りに似て壮絶だったというが、少女を生んだ後、地方の豪族に雇われ姿を眩まし行方が知れない。父の手元に残されたのは、一輪の白い花。それは何の手がかりにもならなかった。父は必死で母のことを捜したが、ついにその痕跡を見つけることすら叶わなかった。母の存在を知る者は多いが、誰もがその実体を知らなかった。人々は声を揃える。

??あんなに美しく舞う女は他にいない。

人々が母について知っていたのは、その程度のことだけだ。そして、父が母について知っていたのも、その程度のことのみであった。

母を探すことをついに諦めた父は、細々と曲をつくるだけでは娘一人養うことも出来ないのだと気付き、娘を世話になっていた劇団の長に預け、軍隊に入隊した。やがて戦火が勢いを増したのはそれ

から間もなくのことであつた。父は軍隊に入つたきり、二度とは戻つてこなかった。少女の中の父親は、若い姿のまま老いることを知らない。せめて少しは娘に金銭を持たせてやろうと、父は財産の全てを売り払ってしまったために、形として父の存在を思い出させてくれるものすら少女には残されていなかった。

ただ、父親の書いた曲だけが、少女の手元に、耳に、心に残つた。それは少女の声を通して世界へと、微量ながら発信されていく。少女の声は異彩な輝きを放ち、たちまち有名になった。その声を武器に、彼女は生きていく術を手に入れるわけだが、それは両親が唯一少女に授けた宝物であり、特殊な『力』だつたと言えるかもしれない。

1、歌姫フェリア

北国ラウグリアが隣国と戦を始め、そろそろ十三年の月日が経とうとしていた。領土を巡る国同士の規模の大きな喧嘩には、なかなか終止符が打たれない。時には剣を交え、時には話し合うこともありながら、解決の糸口は全く見出されていなかった。それどころか、問題はこじれていくばかりである。

それまで数百年に渡って穏やかだったというラウグリア帝国であるが、今では軍人ばかりのはびこる軍国になりつつあった。軍人は国で最も儲かる職種であるため、目指す者は後を絶たない。いつ死ぬともわからぬ職だと言うのにそれほどまでに人気があるのは、未だラウグリアの国内に戦火が飛ぶことがなかったためかもしれない。戦の凄惨さを目にするこのできない国内において、軍人というのは軍に属しているというだけで様々な優遇をされる羨ましい存在であった。

戦は国境付近か、あるいは遠い異国の地に広がっている。そのため最も国境から遠い首都エルヴァにおいてはほとんど現実感のない話であった。町は酒場や劇場が栄え、活気に溢れている。訪れるのはやはり軍人ばかりで、鼻屑にしてくれればいくらでも金をはたいてくれる、最高の客であった。そのため、どの店も、劇団も、顧客を捕まえようと躍起になった。

フェリアはその激戦区の中央にある小劇場の一つで、歌手をしていた。夕方にさしかかると、町の人通りが多くなる。そして完璧に日が落ちる頃には劇の幕が上がる。フェリアはちらと楽屋の窓から外を見やって、空が赤く染まり始めるのを確認した。フェリア以外の歌手や踊り子たちもぼちぼち楽屋入りしつつある。そろそろ支度を始めなくてはならないが、もう十年以上続けている代わり映えのない動作が億劫だった。

横にいくつか並べられた化粧台の一つを選び鏡の前に腰掛けると、フェリアは頬杖をつく。立ち上げれば上半身が全て映し出せるほどの鏡の中に自分の姿を見つけ、ぼんやりと眺めた。

父親譲りの柔らかなブロンドの髪と、透き通った青い瞳。目や鼻の形、笑うと持ち上がる口の端などは母親に瓜二つだと言う。フェリアは母親の姿をおぼろげにしか覚えていない。だが、舞台を通して時折出会う母を知っているという人に話を聞けば、「なるほど、だから君もそんなに美しいのか」と誰もが恍惚と宙を見つめた。そこから、母親が民衆にどのように見られていたのか大体の予想はつく。しかし、例えば万人の憧れの存在であつたとしても、フェリアは母親が大嫌いだった。

「フェリア」

唐突に名を呼ばれてはつとフェリアは意識を取り戻す。鏡の中の自分から声のした左方へと視線を移すと、左隣の化粧台の前に一人の女が凜と腰掛けていた。フェリアより三つ年上である彼女は、ベーラと言う。フェリアが歌うことを専門にしているのに対して、ベーラは踊りを専門にしていた。いわゆる踊り子というやつで、ベーラはその中でもトップの座にいる。

「自分見てて、楽しい？」

淡々と言つて、ベーラは櫛で自らの長い黒髪を梳かしはじめた。

ベーラはフェリアよりも年上であるが、二人の間に上下関係はない。それはベーラが頓着しないためかもしれないし、フェリアが不行儀であつたためかもしれないが、何よりの理由は互いにとても気が合うためだ。フェリアはこの劇場内で唯一本音をぶつけることの出来る相手をにらみつけた。

「楽しかないわよ。準備が面倒なだけ」

「あ、そうなの。てつきり自分に見惚れてるんだと思った」

傍からは厭味にも聞こえなくはないが、ベーラに悪気はこれっぽっちもない。思ったことをそのまま口にしてしまう彼女は、他人と

感覚が違うと言おうか。とにかく、この一風変わったトップダンサーと対等にやっていけるのは自分しかないのではないかと、フェリアは密かに自負している。

「自分に見惚れるって……そんな今更なことはしないわよ。もう二十年この顔と付き合ってたんのよ」

「準備が面倒なのも今更だと思っけど。もう十年以上毎日やってることじゃない」

ベーラは言いながら慣れた手つきで前髪を止め、顔に下地を塗った。なんとなくむっとしながらも、舞台に穴を開けるわけにはいかないでフェリアも渋々化粧を始める。すでに衣装は着ていた。今日は久々に演目前に何の予定もなかったので、一人楽屋でのんびりと過ごしていたのだ。

「今更、かもしれないけどさ……毎日同じこと繰り返して嫌になつたりしない？」

「プリマドンナってもてはやされるのが嫌になったの？」

「もてはやされるのは嫌じゃないわ」

「でしょうね。あんた、歌うのは好きだっていつも言ってるもんね」

「そりゃ、歌うのは好きだけど……」

歌ならば何処でも歌える、と言いかけてフェリアは口を噤んだ。

それはフェリアにとって、禁句であった。決して言ってはならないと自分で自分に何度も誓約させた一言である。

言葉を一つ飲み込んだフェリアは、白粉を軽く顔に乗せて瞼の上にも色を重ねた。鏡越しに背後を見やれば、楽屋の中がうるさくならはじめている。本番前に見られるいつも通りの風景だった。そろそろ客席も賑わい始める頃だろう。

早く準備を終えて化粧台の前を譲ってやらなくてはならないな、とフェリアは手に力をこめる。後ろを通ったダンサーの一人に紅を取ってもらい、筆を浸して唇に赤を塗り始めると、突如軽快な足音とともに楽屋の扉が勢い良く開いた。

「フェリアっ！」

続いて聞こえてきたのは甲高い少女の声。少女が扉から手を離すと、古びた木の扉は苦しそうな呻きをあげながら元の位置へと戻っていった。いつかこの少女の力によって、扉がへし折られてしまうのではないかとフェリアは半ば本気で心配になった。

「アンナ……もつと静かに入ってきなさいよ」

「だって、だって！ それどころじゃないの！ また今日もいらしたのよ、あの軍人さん！」

「誰よ。客なんてみんな軍人じゃない」

「違うっ！ ほら、前言ったでしょ！ 一際きらきらした素敵な軍人さんがいらっしやったって！ 覚えてないのっ？」

アンナという小柄な少女は、この劇団のソプラノ歌手の一人であった。フェリアが体調を崩すなどしてやむなく舞台に穴を開けると、アンナが代役になることが多い。期待の新星とも呼ばれ、何よりプリマドンナであるフェリアに懐いていた。フェリアも、少女のことを実の妹のように可愛がっている。とは言え、親も違えば生まれも違い、所詮は他人だ。どんなに可愛がったところでフェリアにはこの少女の感覚を理解することができなかった。アンナは何かと客人として現れる軍人に目を付けてははしゃぐが、フェリアの目にはどれも同じ、金を置いていく男としか映らない。

「あんたがいつつもそうやって次から次に新しい男見つけてくるから、私だんだんどれが誰だかわなくなっちゃった」

「フェリア、そんな年寄り臭いこと言わないでよ。今回ののは今までとは全然別なんだから！」

年寄り臭い、という表現を受けて左隣の親友が忍び笑いを漏らしている。ぎろと睨みつけてやると、彼女は「私準備終わった」と知らん振りをして席を立った。空いた席にはアンナが遠慮なく腰掛ける。フェリアの隣を陣取った少女の勢いは増していくばかりだ。

「他の兵士たちと比べてもね、なんていうのかな……輝いてるの！」

「どれもむさくるしいだけじゃない」

「違うんだって！ 一人だけスマートでね、たぶん年齢も若いんじゃないかしら」

「若いのか？ じゃあ最近軍隊入りしたばかりね。そのうち訓練に音を上げて、こんな劇場に来る暇もなくなるでしょうよ」

「ううん、なんか新入りって感じでもなくて……若いのに、落ち着いてて、素敵なの！」

「……つまり貴女の好みなのね」

舞い上がってしまったているアンナには、何を言ったところで聞き入れてもらえない。

フェリアはさっさと化粧を終わらせて、楽屋を出ることにした。

人口密度が濃くなり、そろそろ息苦しい。鏡の前で入念に自分の顔を見直すと、椅子を引いて立ち上がった。

「男ばっか見てないで、きちんと仕事もなさいよ」

「それ、フェリアには言われたくない」

「私は仕事のために男と会うの。一緒にしないで」

「やーね、なんか乾ききってるかんじ」

先輩歌手の苦言を物ともしないアンナに、フェリアの方が苦りきってしまう。それでも嫌味に聞こえないのは少女の持つ愛嬌の成す技だろう。これ以上小言を言うのは諦めて、フェリアはダンサーの一人に場所を譲った。準備が間に合わないと、数人の出演者たちはてんでこ舞いになり始めている。彼女たちの邪魔にならぬよう重い衣装を引きずりながらも壁際に避けて、フェリアは古い木戸を引いた。きい、と軋むその音に反応し、アンナがこちらを振り返る。

「フェリアっ！ その人ね、一階席の後ろから四列目の一番左に座ってるから！ よく見てみてねっ」

駄目押しするように言い放ち、彼女は化粧台に向き直った。鏡越しにも、少女の浮かれた様子が見て取れる。周囲に花を散らすような上機嫌っぷりに、フェリアは戸惑った。彼女の容姿が愛らしいのは不変の事実であるが、浮かれていると一層華々しい。

アンナはフェリアのことを年寄り臭いと言ったが、あながち間違っ
てはいなかった。フェリアは若い娘のように艶やかな心を持って
いない。娘たちを輝かせるような歓びに対して従順になれないのだ。
??そのような純真さは、とうの昔にどこかへ忘れてしまった。

父の後姿を見送った懐かしい日から、フェリアは人の心を信じる
ことができない。

??フェリア、待っていてくれ。きつと帰ってくるから。

そう最後に言い残し、父が都を去ってから、もう幾年過ぎただろ
う。当時十に満たぬ童女であったフェリアも、今年で二十を越えた。
十数年のうちに劇団のプリマドンナになったフェリアの名声は、今
では都を離れて遠い田舎の町にも聞こえるほどだという。もしも父
が今もどこかで生きているなら、噂を聞きつけて戻ってきてくれる
かもしれない。そんな淡い期待さえ、数年前には捨てていた。今で
は単純に歌を歌うことだけが、フェリアを支えている。

今宵は星も見えない曇天の夜であった。都を照らすのは、華やか
な店から漏れる色鮮やかな灯りと、都の中央にそびえたつ巨大な王
宮の松明のみである。

都の人々は闇を恐れない。本当の闇をまだ見たことがないためだ。
暗闇の中で揺れる艶かしい光に心を躍らせ、劇場へと人がとめどな
く流れてくる。それは、昼間の仕事を終えた軍人たちの数少ない楽
しみだった。とは言え都の兵士の仕事は、王宮の門番であったり都
の治安維持であったり、範囲が限られている。外へ派遣される兵士
たちは、自らにも明日の仕事の内容がわからなかった。彼らには、
一つの楽しみもないかもしれない。

どちらにせよ、とフェリアは幕の端から客席を窺った。軍人で溢れているその光景も、大分見慣れたものだ。どちらにせよ、軍人なごろくなものではない。国外の兵士は人の命を奪い、都の兵士は夜な夜な女を奪う。どちらも、何一つ与えてはくれない。

「フェリア」

男の声がして、ふと肩を叩かれた。ちらと目線だけを動かせば、灰色の髭を生やした男がフェリアと一緒に幕間から客席を見下ろしている。

「今日も大入りだな。うちのプリマの人気は衰えない」

「……衰えて欲しいみたいない方ね」

「まさか。閑古鳥の鳴く劇場を維持できずに悔し涙する他の団長どもの仲間入りはしたくない」

男は燕尾服の襟元を調べて、素っ頓狂な顔をした。グロピウスというこの男は、劇団の長を務めている。作曲家であったフェリアの父とは往年からの付き合いで、父の作った曲をいつでも真っ先に採用してくれたのはグロピウスの劇団であった。人付き合いの不得手な父にとって、グロピウスは貴重な相談相手だ。ゆえに、入隊する時にもこの劇場以外にはフェリアを預けることができなかった。

「フェリア、明後日の夜、スールイ公からお招きがあった」

「明後日？ 急な話ね」

「仕方あるまい。ご公務の合間を縫ってお前に会いたがっているんだ」

「まあ、私はいいけど……舞台にまた穴開けちゃうわ」

「アンナがいる。なんとかなるだろう」

フェリアは首をすくめた。本来、何よりも舞台を優先させるグロピウスが譲歩するのは、スールイ公からの招待くらいのものであった。

グロピウスの劇団には女しかない。舞台の監督や合奏団、小間使いたちの中には男もいるが、舞台に上るのは女だけであった。そのためフェアリアを含めた女歌手や女ダンサーは、たびたび客から呼ばれることがある。舞台の上での晴れ姿を見て、間近で会いたくなるのだそうだ。グロピウスはそれを厭わないが、面会の代わりに金をとる。また、それは強制されるものではなく、女たちには断る権利があつた。そのため、舞台に通い詰める男たちはまず、目当ての女に気に入られるためにと楽屋へ贈り物を寄越す。女はその送り主を舞台上から確認し、気に入れば面会を許すという仕組みになっていた。

だが、スールイ公はそう言った客人とは待遇が違う。彼はこの劇団の後援者である。例えばグロピウスがどれだけ商売上手であろうが、この小劇場では観客の払う金だけで他との激戦に勝利することはできなかつた。そこで、スールイ公の後援がとても重要になってくる。月に一度莫大な後援金を寄越す公には、突然劇場を貸し切ることも、唐突に稼ぎ頭であるプリマを呼び出すことも可能であつた。

スールイ公からのお招きとあれば、他の男たちと違って拒否することは出来ない。そうしていつも呼び出されるフェアリアのことをアソナなどは「あんな親父に呼び出されて可哀想に」と哀れむが、フェアリア自身は一度も厭わしく思つたことなどなかつた。フェアリアには、スールイ公も若いダンサーたちの喜ぶ凜々しい軍人も、等しく見えた。むしろそれならば、金銭に余裕があり、決してフェアリアに不自由させないスールイ公の方に利があると思えた。

開幕の合図の鐘が鳴る。けたたましいその音に、フェアリアは我に返つた。気付けば、出演者たちは各々の立ち位置にて待機している。「フェアリア」と他の出演者たちが小声でこちらに呼びかけていた。物思いに耽つていたために全く耳に入つてこなかつたが、どうやらずっと催促をしていたらしい。慌てて促されるまま、フェアリアは奈落へともぐつた。それと同時に、前奏が始まる。危機一髪、間に合

っ
た
よ
う
だ
っ
た。
。

2、謎の男

プリマの登場は、奈落の底からと決まっていた。何度も劇場を訪れている常連は、そのシーンになると待ってましたとばかりに拍手喝采する。曲目が変わろうと、演目が変わろうと、奈落から上つていく時に舞台上から見える光景は変わらない。誰も彼もが期待に満ちた目で、フェリア一人を見つめてくる。誰も彼もが彼女に陶醉し、顔をだらしなく綻ばせた。??人々は、フェリアに幻想を抱いている。

曲が中盤にかけて盛り上がっていく。それに合わせてフェリアの乗った迫出しの台が持ち上げられた。人の力で動かされるため、ぎこちなく上下しながらゆっくりと舞台上を目指す。クライマックスに合わせて盛大なシンバルの音とともに、照明が全てこちらを向いた。いつもどおり、客席からどっと拍手が起こる。フェリアは人々の幻想を裏切ることのないよう、極上の微笑みを浮かべた。

曲調が変わり、チェロとピアノの音のみを伴奏に、大人しいメロディを歌に乗せる。それまで派手であった照明も薄い青一本に絞られ、フェリアはゆっくりと歌いながら舞台へ一歩踏み出した。

このシーンになると、照明が暗いため、客席の様子がよくわかる。客のほとんどが軍人であり、その全てが恍惚としているのが瞭然になるのだ。彼らは、フェリアを見つめているようで、実は何も見えない。プリマという看板を背負った彼女のことを透かして、自分の理想を思い描いている。フェリアは彼らの理想を壊すことのないよう歌で場面を盛り上げる。それが彼女の仕事だ。

だがしかし、今日はその中に奇妙な視線を感じた。誰も彼もが宙

を見つめてうつとりしているのに、その視線だけはまっすぐフェリアを捕えて離さない。他の誰でもない、フェリアのことを見ているのだ。突き刺すようなその鋭さに、威嚇されている気がしてフェリアは舞台の最前に出ることを躊躇した。客に怪しまれることのないように歌うことはやめず、さりげなく視線の元を探る。

??一階席の後ろから四列目の一番左。

軍服を纏った男であった。軍人であることは確かだが、暗闇に包まれている上に距離があるため肩章までは窺えない。地位はわからないが、やけに覇気のある男だった。雰囲気からのみ判断すれば経験を積んだ老兵のようだが、いかんせん見た目が若い。ゆえに、奇妙だと思う。

男の眼光の鋭さに負けじとフェリアは胸を張った。高らかに高音を歌い上げ、くると衣装を舞わせながら、ふと楽屋でのアンナの話进行を思い出した。

??フェリアっ！ その人ね、一階席の後ろから四列目の一番左に座ってるから！

まさに、その男の座っている位置である。

ああ、あれがアンナの言う、とフェリアは納得した。確かに一際目立つ軍人ではある。そこに何かしらの魅力を見出せはしなかったが、アンナが目をつけた理由はなんとなく理解できた。

（あの子は目立つ物が好きだから）

フェリアは観客に向かって大きく手を広げた。ここが劇の最初の盛り上がりだ。プリマのソロが終わり、一気にオーケストラが参入してくる。華やかな音の重なりとともに、今まで消えていた照明にも一斉にスイッチが入る。フェリアが最後の一音を歌い上げると、盛大な拍手が起こった。フェリアは胸の前で手を重ね合わせて息を

吸う。網膜を痛いほど刺激する光の所為で、もはや観客の顔を見ることは適わなかった。あの奇妙な男の姿も見えない。

上手に捌けながら、彼女はさりげなく男のいる方向を一瞥した。すると、姿は鮮明でなくとも確かにこちらを見ているとわかるほどの強い視線を返される。フェリアは眉根を寄せて、幕の裏へと逃げるように引っ込んだ。

??なんだろう、あの男は。

本能的に、身を震わせた。

明るい舞台の方からは豊やかな旋律が絶え間なく聞こえてくる。演目はまだ、始まったばかりだ。

一通り演目が終わると、女たちは楽屋へ一度帰る。化粧を落とし衣装の着替えを行い、その間にファンからの贈り物が届けられる。その内容によって女たちは呼び出しに応じるかどうかを決める。応じる場合はその男のもとを訪れ、拒む場合は「また次の機会に」と鑑賞券が一回限り割引される優待券を丁稚に託す。

フェリアは劇団の看板とだけあって、届けられる贈呈物の量が他の踊り子や歌手の二倍近くあった。アンナなどはそれを羨むが、正直言って面倒臭い。全員の相手を出来ればいいのだが、体は一つしかないためその中から一人を選ばなくてはならず、その作業がまた億劫だった。

「ベーラ」

フェリアは暑苦しいプリマの衣装を脱ぎ捨て普段着にしているドレスを纏う。隣にいる親友も、フェリアほどではないにしろトップダンサーの肩書きのためか大量の贈呈物を抱えていた。フェリアは

たくさんの贈呈物の中から最も高価そうな物を選ぶため、仲間たちにはもう少し相手の男を考えると諫められるが、ベーラの場合はさらに淡泊である。彼女は最初に目に入った物を持ってその送り主に会いに行った。曰く、「直感は裏切らない」。フェリアのやり口には散々非難を述べる少女たちも、ベーラに対しては何も言わなかった。どうにもこのトップダンサーの所作は一つ一つ何かを超越しているように見えて、周囲にも口の出しようがないのだ。

フェリアは、今回も贈呈物の山を受け取り三秒ほどで答えを出したベーラの肩を叩いた。

「アンナの言っていた軍人、あんたも見た……？」

「ああ、ナイザー准尉でしょ」

ベーラは真っ先に目に付いたらしい熊のぬいぐるみを片手に取って、高く結わえ上げた髪を解く。艶のある黒が広がった。フェリアは澄ました親友の顔を見て、瞬く。

「……知ってるの？」

「有名なもの」

ベーラの受け答えはいちいち短絡的である。わかりやすいと言えばわかりやすいが、詳細が何も伺えない。フェリアは彼女の使っている化粧台の上に腰掛けて、先を促した。鏡の前を遮られてベーラは少し鬱陶しそうな表情をしたが、すぐに諦めたのか、櫛をとって髪を梳きはじめる。

「軍人の間では有名なんですって。オレーク・ナイザー。まだ准尉だけれど、あちらこちらで功績をあげてて、ラウグリアの新星だそうよ。彼が昇進すれば西国エウリアの滅亡も遠くないって」

「……そんなに凄いの？」

「知らない」

「でも、それだけ知ってるんなら、アンナに教えてあげればよかったのに」

「聞かれなかったもの」

フェリアは肩を竦めた。

あの男は、舞台上からでもわかるほど他とは明らかに違う空気を纏っていた。今まさに獲物を狩ろうとしている猛獣のようなあの覇気は、近い将来他国の軍隊を滅ぼし他国そのものを滅亡させるための物だったのか。フェリアは複雑に交錯する胸のうちをぐっと押さえ込む。

「……野蛮だわ」

「それが軍人の仕事でしょう」

「大体そんなに凄い人がどうしてこんな民衆の劇場に来てるのよ」

「彼だつてただの民衆よ」

言い返すことが出来ずに、フェリアは口を噤んだ。楽屋の外から自分を呼ぶ丁稚の声が聞こえる。今日は誰の誘いを受けるのか、あるいは誰の誘いも受けないのか早く返事を寄越せとの催促だろう。

「行かないの？」とベーラが横目に問いかけてくる。フェリアはふんと鼻を鳴らした。

「どんなに偉くつたつて、所詮軍人だものね」

「軍人だろうとなんだだろうと私たちにとっては大切なお客様よ」

ベーラの言葉にはあえて反応せず、彼女は化粧台から降りた。自分への贈り物の束の中から最も値の張りそうな金の時計を選んで化粧を落とす女たちの間をかきわけた。

「おつかれさまです」という後輩たちからの挨拶にはにっこり笑って返す。先輩の幾人かがこちらを睨んでいたが、それに対してにもにっこり笑っておいた。自分より後に劇団入りしたくせにあつという間にプリマの座をかつさうっていったフェリアのことを妬む女も少なくはないのである。また、彼女たちの反感を買う要因はフェリアの不遜な態度にもあるわけだが本人は気がつかないふりをしていた。

楽屋の外へ出ると新鮮な空気の臭いがする。劇団に入った当初は終幕後の楽屋などあまりの香水の濃さに息の出来たものではなかったが、今ではすっかり慣れてしまった。

フェリアは丁稚に金の時計を渡し、大きく伸びをした。丁稚の事は女たちの選んだ送り主を探し、それ以外の男を追い帰すことである。店の前で争い沙汰の起こらぬように、選ばれた男以外は女の姿を見ることが禁止されている。

フェリアは自分のブロンドをかきあげながら、こつそり窓の外を覗いた。何人かの男がわらわらと帰っていくのが見える。そしてその合間に、あの男を見つけた。思わずフェリアは目を細める。

（ナイザー、准尉……？）

夜闇の中、照らす物は頼りない街灯のみであるため一瞬見間違いかとも思ったが、確かにそれは先刻劇場にいた例の男であった。やはり奇妙な男で、傍らに幾人かの女を従え？その風体からして、貴族階級の女に見えた。貴族の女が外へ出ることはとても珍しい。？特にこの劇場の女を待っているわけでもなさそうである。何のためにまだ劇場の前に残っているのか、甚だ不思議でならない。その委細を探れないかとフェリアが窓辺に身を乗り出そうとすると、「プリマ」と声をかけられた。丁稚が戻ってきたらしい。この劇団の丁稚はなかなか有能で、名残惜しむ男どもを追い払うことにかけては天才だった。

仕方なく、フェリアは窓から離れる。表には決して見せられない汚れた通路は、裏玄関へ通じている。観客のためには開かないその門は、内側から団員達が出るためだけに使われていた。そして大抵、男たちはその前で待っている。

フェリアが門をくぐると、金の時計を手にした男が優越感たっぷりにこちらを見下ろしていた。何度か見たことのある顔である。おそらく裕福な家の出身なのだろう。彼はフェリアのために相当な額を費やしているはずだ。

「待たせたわね」

仕事のための笑顔を貼り付けて、彼女は男のことを見上げる。当然のように差し出された腕に自分の腕を絡ませて、二人は歩き出した。この男はプリマと一緒に過ごす時間を楽しむため、無理に会話をする必要もない。フェリアにとってはこれ以上ないほど楽な仕事だった。

劇場から離れる前にふと気になって男たちのたむろする門の前に視線を投げたが、すでにナイザーの姿はなかった。あの貴族風体の女たちと何処かへ行ったのだろう。本当におかしな軍人である。

あまり余所見をしては仕事にならないので、フェリアはすぐに彼のことは頭の中から追いやる。それがどんな男であろうと、フェリアには関係がない。彼女は黙って自分の役をこなすだけである。

3、歌姫の力と矜持

アナトリー・ヘルム公爵。貴族制度により支配されるラウグリア国にて公爵の地位を持ち、首都エルヴァから南西の方角へ離れたスールイと呼ばれる田園地域に屋敷を構える男である。数年前に父から位を継いだ。スールイ公という通称を持つ。

彼の屋敷に呼ばれたフェリアは、朝一番に馬車に乗せられ、午前中いっぱい揺られて過ごした。その道中で転寝をしてしまっていたらしい。目が覚めると、普段過ごしている都とはまるで違う、延々と続く緑に包まれていた。

他国には「北国」とも呼ばれるラウグリアでは、秋から春にかけて地面が凍り雪に覆われてしまったため、田畑を構えるのが難しい。スールイは、ラウグリアの中でも珍しい稔り豊かな地域であった。季節は夏であり、草木は青々と茂っている。フェリアが来るなり喜んで屋敷内へと迎え入れた公爵は、自慢気にテラスから一望できる景色を見せてくれた。外へ出る時は常に仮面をかぶるフェリアも、この時ばかりは素直に感動を覚えた。ラウグリアにおいて、これほどの緑を見ることが出来るのはスールイだけではないだろうか。

テラスでの昼食を終え、フェリアは公爵に頼まれるままに歌を歌った。舞台上で壮大なオーケストラに合わせて歌うのも嫌いではないが、こうして伴奏もなく好きな曲を口ずさむのはまたそれとは違った良さがある。フェリアの父がかつて残した曲のほとんどは、どちらかと言えば鼻歌程度に口ずさむことに向いており、フェリアは歌をねだられると必ず父の歌を歌った。

揺り椅子に腰掛け、瞑目してフェリアの歌に聞き入っていた公爵は、それが終わると同時に軽く手を叩いた。舞台に響く盛大な拍手

も、一対一で自分へと贈られる素朴な拍手も、フェリアには同じ重みに感じられる。

「???君には、力があるね」

それはフェリアが歌うと、たびたび公爵の漏らす感想であった。評論家たちも、劇場を訪れれば「力のある歌手だ」と口を揃えていたので、おそらくそれらと同じ意味なのだろう。その「力」とやにより、フェリアは他の歌手たちを制してプリマになり、他の劇場を制して自らの劇場を繁栄させたのだ。フェリア自身が望んだ以上に、その力は強大だった。

「公爵様の、プリマですもの」

フェリアはさらりと答えて会釈する。公爵は満足そうに頷くと、ソファーに座るよう促した。テラスに通じる広い居間には、一人掛けのソファーが六つ置いてある。中央にはガラスのテーブルがあり、シャンデリアの光をきらきらと反射させていた。

フェリアの腰掛けた向かいに腰を下ろしたスールイ公の頭髪には、ちらほら白髪が混ざっている。位をもらって家を受け継ぎ、仕事をやりはじめる時にはすでに年老いてしまっているという貴族の生き方は、フェリアには理解しがたいものであった。

「相変わらず美しい声だな」

「おかげさまで、まだプリマの座を守り通していますわ」

「お前に敵う新鋭はそうそう現れるまい……。歌の御礼と言ってはなんだが、何か欲しい物はないか」

「欲しい物、ですか？」

「贈る物として一般的な物は何不自由なくファンからもらっているだろう？ お前が欲しいと思う物はなんだ」

フェリアは思わず唸りを上げた。

何か欲しい物はないか、とはフェリアへ向けられる問いの中でも最も多い物の一つであった。なんとかして人気者のプリマの心を自分へ向けようと四苦八苦するファン達は、彼女の望む物を知りたがる。だが、正直なところ、フェリアには格別欲しい物などないのだ。

それでもいつもはその時々に応じて相手の男に用意できそうな物を選んでねだっていた。しかしスールイ公を相手にすると、言葉に窮してしまう。貴族階級の中でも最も高い位に拝命されている彼に、大抵の物は手に入れられてしまうから。

「……公爵様、私、欲しい物なんてございませんわ」

正直に答えると、銀の縁を持つ眼鏡の奥が、興味深そうな色に輝いた。

「欲しい物がない、と？ 若いくせに、うちのプリマには欲がないな」

「欲がないわけではありません。でも、欲しい物ってなんでしょう……」

フェリアはメイドが出してくれた紅茶のカップを手にとって、赤い水面に目を落とした。ゆらゆらと波打つ中に、自分の顔が見える。

「公爵様のおっしゃる通り、ありとあらゆる物が連日私の元へ届けられます。形ある物には不足しておりません」

「では、形ない物が欲しいか」

「そういうわけでもありません。私は歌が好きですけど、歌うための場所もあれば歌うための声もあります。私をプリマにまで持ち上げてくれた容姿も、世話を見てくれる人も、友人だっております。大勢の人に愛されてる自覚だってありますわ。しいて言うならお父様に帰ってきて欲しいくらいです」

「お前を芝居小屋に預けて消えた父か。さすがに行方の知れぬ軍人を探すのは、私にも難しいな」

「それどころか、生きてるかどうかも定かじゃありませんもの」

フェリアは誤魔化すように笑ってみせた。気まずい空気にならぬようにと口に含まんだ紅茶は甘い。何の葉を使用しているのか、花のような香りがした。

「……では、今のフェリアは満たされているということかな？」

「……それは」

フェリアは再び考え込む。満たされているかと問われれば、答えは否であった。しかしながら、何が足りないのかはわからない。ゆえに日々、理由なき憂いを感じている。

「例えば、劇場を出てみたいと思ったことは？」

「え……」

「フェリアは、自分には歌う場所があると言ったが、その声さえあれば、歌う場所など何処でも確保できよう。何もラウグリアの小さな劇場にこだわる必要はあるまい」

「それは、どういうことですか」

「私と一緒に西国へ行く気はないか」

フェリアは目を大きく見開いた。

「……冗談でしょう？」

「本気だとも」

驚きのあまり手から滑り落ちそうになったカップを受け皿に置き、テールへ戻す。まっすぐ見つめてくる公爵の目は、「冗談を言っているようには見えなかった。

「でも、西国エウリアは、戦地なのでしょう……？」

「東国ほどではない。今のうちにもぐりこんでしまえば問題ない」
「けれど、どうして……？」

「近い将来、西国エウリアはこのラウグリアの確固たる敵になるだろう。その時に、敵情を探ることが出来ればいいと思わぬか？」

「そんなこと……公爵様のやるお仕事ではありませんわ」

「軍に任せておけと言うか？」

普段柔らかな物言いしかししない公爵の強い口調に、フェリアは言葉を呑んだ。公爵は掌を重ねてその上に顎を乗せる。いつになく難しい顔つきをしていた。

「この国は皇帝を中心とした貴族の国だったが……その時代はもう終わった。今、国は軍に食われてしまっている」

フェリアは頷いた。かつて、都へと降りて劇を鑑賞するのはほとんど貴族ばかりだったという。しかし、フェリアはその時代を知ら

ない。彼女が舞台に立つようになってから、客席が軍人で埋まらない日はなかった。

「そのうち軍は我々貴族の存在をも疎むようになるだろう……その前に、私は軍に重宝される存在にならなくてはいけない」

公爵の言い分は尤もに聞こえた。フェリアは国情などほとんどわからぬ。しかし、都を闊歩する軍人の横暴な振る舞いを目にすると、彼らが本格的に権力を握るなりそれまで王宮を支配していた貴族を排除するのはごく自然の成り行きに思えた。

「……公爵様のお考えは、よくわかりますわ……けれど、どうして私と一緒に？」

公爵の気分を害さないようにと、緩やかに問いかけると、硬かった彼の表情が一気に和らいだ。いつも通りの公爵の顔だ。

「お前がいれば、見知らぬ西の地でも路頭に迷うことはあるまい。もともと劇場すら所有していなかったグロピウスの劇団をあそこまで繁栄させたように、きっと幸福をもたらしてくれる」

「そんな……買いかぶりすぎですわ」

「買いかぶりなどではない」

公爵の顔が再び険しくなる。

「お前には、力がある」

今まで何度となく繰り返されたその台詞が、やけに重々しく聞こえた。フェリアは、はいともいいえとも言つことができない。金縛りにあつたように固まってしまった。その昔、母が地方の豪族につれられて劇団から姿をくらましたことが頭をよぎる。自分は、決して母のようにはならない。それだけを心に決めて生きてきた。もしここで安易に公爵の手をとってしまったら、それは自分への裏切りとなり、父への裏切りとなるのではないか。そう思うといくら公爵様の頼みであっても、軽々しくは領けない。

黙りこくつて俯いたフェリアに、公爵は「今すぐにといいわけではないから」と付け加えた。彼は本気である。フェリアはしばらく言葉を探して黙り込んでいた。

「この一件は他言無用」と公爵に釘を刺され、フェリアが彼の邸宅を出たのは夕暮れ時のことであった。まだ先のことだからと彼は言ったが、グロピウスに聞こえてしまったら彼がパニックに陥ると見越したのだろう。グロピウスはプリマドンナとしてのフェリアはもちろん、自分の友人の娘としてのフェリアも大切にしてくれている。フェリアの父、ラドレッサが戻ってくるまで何があっても護つてやるからとは彼の口癖だった。フェリアも、グロピウスを父の代理と思っている。余計なことで心配をかけたくはないが、彼に黙つてこの件を自決する気もなかった。とりあえず、しばらくは様子を見ることにして、口を噤んでおこうと決める。

邸宅の門の前には、フェリアが都から乗ってきた馬車が彼女を待っていた。劇団が唯一所有している車で、グロピウスやフェリアなど劇団の重役しか滅多に使わない。そしてその隣には見知らぬ馬車が停車している。丁度今到着したようで、馬が足並みを整えると、馬車の扉が開いた。スールイ公の客人か何かだろうとフェリアは大して気に止めず、自らの乗る車の方へ回った。劇団専属の御者が車輪の脇に控えている。なぜかそわそわとしていて落ち着かない。彼はフェリアの姿を見つけると、はっとしたように顔をあげて、駆け寄ってきた。

「プリマ……！」

そのただならぬ様子に、フェリアは何事かと目を瞬かせる。昼時に此処へきてから数時間が経過しているが、その間に何か事件が起こったのだろうか。御者は困惑したように馬車の方をちらちら眺めながらフェリアの顔色を窺った。

「実は、その……馬車の車輪に故障が見られまして……」

御者はおどおどしながら、馬車の後輪の方を示した。つられて後輪を見るが、フェリアの目では故障の有無などわからない。鉄で作られた黒い輪は、おおよそ不調があるようには見えなかった。

「外側からはわかりづらいもので……私も、まるで気付かず、ここまで来てしまいましたか……行きに無理をさせてしまったようで、帰りはエルヴァまでもつかどうか……」

「まあ……」

都まで辿り着ければ、そこからは町馬車を拾ってもいいし、いざとなれば歩いても戻れる。しかし、その途中の砂利道や山道で身動きが取れなくなってしまったら、もはやなすすべがない。

フェリアが柳眉を寄せると、御者は縮こまった。馬車を走らせない時は、馬車や馬の整備が彼の仕事である。車の不調に気付かなかったのは彼の落ち度だ。おそらくフェリアを待つ間にそのことに気付き、今まで自責の念に駆られていたのだろう。グロピウスがいれば団長としてその失態を叱るだろうが、プリマにその権限があるかどうかはわからない。ただの不平になってしまいかもしれないし、そもそも彼を責めたところでどうしようもないので、致し方なくため息を吐いた。

「公爵様に頼んで、馬車を借りるしかないわね。私は明日も舞台があるし……」

「申し訳ありません……」

深々と頭を下げた御者を前に、フェリアはすっかり窮する。公爵から馬車を借りられればいいが、彼の足を奪ってしまつては、公務に支障をきたしてしまうかもしれない。公務と天秤にかけられてしまったら、フェリアの舞台に勝機のあるうはずもなく、フェリアは足止めを食らってしまう。

「とりあえず、私は早々に都へ戻ります」

「壊れた馬車で？」

「私一人なら、なんとかかなります。いざとなれば馬に乗って帰りますし」

「鞍がないわよ」

「轡はありますので、都までならなんとか……」

いざとなつたら、御者が都まで往復して戻ってくるのを待つしか

ない。とにかく公爵に相談してみないことには始まらない。フェリアが再び門を潜って屋敷の方へ戻ろうとすると、不意に引き止められた。見知らぬ声に、足が止まる。振り返ると馬車に片手を乗せた男がこちらを見ていた。

「お困りのようなら、同乗して行かれぬか？」

先刻、門の前に到着した馬車から降りた人物である。夕闇の中、馬車の影に隠れて顔は見えないが、軍人らしい。普段であれば見知らぬ軍人に同乗を頼むなど有り得なかったが、今は願ってもない話であった。

「よろしいの？」

「構わんよ。これから都へ引き返すところなのでね」

ありがたい、とフェリアが胸の前で手を組むと、隣に控えていた御者もほつと胸をなでおろしたようだった。これで彼の過ちが消えるわけではないが、少なくとも明日の舞台に彼の所為でプリマが穴を開けてしまうという大事故は防げそうである。

「助かるわ」

「元々二人乗りの車だ」

なんてことはない、と男は肩を竦めた。夕日が完全に落ち、道も暗くなる。男の乗ってきた馬車の御者が、自分の車の前灯に火を落とした。ほんわりと暖かい火にその場が照らされる。それまで黒い影でしかかった軍人の顔が炎によって映し出された。それはとても、見覚えのある顔立ちであった。端正な造りをしており、鋭い目を備え、どこか虚無的な笑みを称えている。フェリアは思わず息を呑んだ。

「ナイザー……准尉……」

それは、少し前に劇場の観客席にあった顔と全く同じであった。オレーク・ナイザー。今まさに名を上げている軍人だと、ベーラに聞いたばかりである。まさかこんなところで顔を合わせるとは、夢にも思っていなかった。

名を呼ばれたナイザーの方ははて、と首を傾げている。

「どこかでお会いたか……？」

フェリアは目を丸くした。しばしの間、瞼を下ろすことすら忘れる。それほどの、衝撃であつた。

フェリアは、都ではその名を知らぬ者がいないというほど名だたる歌手である。その姿見たさに劇場を訪れた者は、一生彼女を忘れることなどなく、実際フェリアは知らぬ者から名を呼ばれることはあつてもその逆を経験したことがなかった。しかも、この男は幾度かフェリアの舞台を見に来ているはずなのである。

「……フェリア・パーチスよ。グロピウスの劇場でプリマをやつてるの」

渋々自己紹介をすると、ようやく思い出したように、ナイザーは手を打った。

「ああ……思い出した。何度か舞台を拝見したことがある」

そんなことは知っている。フェリアは苦々しく頷いた。そうであれば、なにゆえフェリアが数多の軍人の一人である彼の名を覚えているというのか。

「偶然とは言え、名高いプリマと同乗できる機会を得たんだ。光栄に思うよ」

どこまで本気かわからない口調で？？ほとんど社交辞令だろう？？彼は言い放つて、馬車の扉を開いた。どうぞとエスコートされて拒むわけにもいかずにフェリアは車へ乗り込む。紅一色に装飾された席の奥へと腰掛けて、まだ外にいる男を軽くねめつけた。

「名高いプリマの名を忘れていた男なんて、始めてよ」

すると、何故だろう、男は声色高く笑った。

「プリマの矜持を傷つけたかな。申し訳ない」

上辺だけの謝罪は、苛立ちを募らせるばかりである。それでも、ほぼ初対面の相手に対してこれ以上憎まれ口を叩きたくなかつたので、ぐつと唇を結んで小窓の外を眺めた。他方のナイザーは少しも気にした様子を見せず、フェリアの隣に乗り込むと扉を閉める。「都まで」と御者に声をかけたところからして、馬車は彼の持ち物で

はないのだろう。この上、彼の車で送ってもらって借りをさらに大きくしたくなかったため、フェリアは心底ほつとした。

齒切れの良い鞭の音に続き、馬の足音と車輪の転がる重い音がする。馬車はゆっくりと前進を始めた。

腰を落着けたナイザーは、赤いクッションに背をもたれて腕を組む。公爵の話によつて悩みを抱えていた上に馬車を損ない、初対面の軍人に無礼を働かれてフェリアの機嫌は最悪だった。これ以上は何も話したくないという意を込めて見る物もない外を眺めていたが、この無骨者には全くと言っていいほど通じなかったようである。

「???ところで、矜持高いプリマが、なぜ俺ごときしがらない軍人の名を知っていたのかな？」

フェリアは、ベーラからうっかり情報を得てしまったことを本気で後悔した。

4、物知らずな歌姫と奇妙な男

走行中、馬車の中は恐ろしく静かだった。フェリアが会話の一切を拒んだためだ。途中まではいろいろと話しかけてきたナイザーも、いい加減に嫌気が差したのか、途中から口を閉ざした。

劇団の外の人間、客になるかもしれない人間に対して無視を決め込むだなんて、こんな行動に出たのは初めてのことだった。フェリアが会話するのは劇団の人間以外には客人くらいなものだし、相手が客であれば例えどんなに嫌いな相手でもフェリアは仮面を被ることができた。そもそも金を払ってまでフェリアに会いたいと言う輩は彼女に対して不遜な態度を取ったりしない。少しでも彼女が気分を害せばプリマの機嫌を取ろうと必死になるので、会話を拒む必要もなかったのだ。

スールイの田園地帯を抜けると、次には山道が迫ってくる。馬車は暗い山道に差し掛かっていた。山奥とは言え人の手によって開かれており、今では住まう獣も少ないが、夜になるとどこことなく不気味である。

「ようやくスールイを出たか……都まで遠いな」

まだ道のりの半分にも到達していない。そう呟いたナイザーにつられて、フェリアも延々と続いている道を見やった。暗闇の中、鬱蒼と生い茂っている山の木々には得体の知れない恐ろしさがある。もしもこんな道の途中で馬車が動けなくなってしまったりしたらと想像するだけで慄いた。隣に座る男は気に食わないが、同乗させてもらった一点には感謝の念が浮かぶ。

「……何の用があったのか知らないけど、貴方がスールイに来ていて助かったわ」

ぼつりと零すと、ナイザーがぴくと反応した。初めてフェリアか

ら能動的に発された言葉に、少なからず喜んでいられるらしい。彼はにやと笑った。

「何用があつてこんな辺境まで来ていたのか、知りたいか」
「いちいち彼の台詞は癪に障るものばかりである。」

「……別に」

「スールイ公のご息女を都から送つたのさ」

聞いてもいないのに説明されて、フェリアはうんざりと後れ毛をかきあげた。

そういえばスールイ公には二人娘がいたな、と思い出す。もしも本当にスールイ公が西国へ行くつもりなら、娘たちをどうするつもりなのだろうと頭の片隅で考えた。その一方で、たかが准尉でしかないこの男が何故仮にも公爵であるスールイ公のご令嬢と知り合ひなのかという疑問が浮かぶ。フェリアは横目でナイザーを見上げた。

「そういえば、一度うちの劇場に来た帰りにも、貴族のご婦人と一緒だったわね。あれが公爵様の？」

「そんなこともあつたな……プリマは意外によく見ていらっしやる」

ナイザーの口の端が持ち上がる。しまったと思うが既に遅い。劇場の窓からこっそり彼の姿を窺っていたことを計らずも吐露してしまったことに気付き、フェリアは恥辱に赤くなつた。

「ちなみにあれはスールイ公のご息女ではないぞ。知り合ひの伯爵夫人の妹御で、一度民衆の娯楽を見てみたいとおっしゃっていたから、グロピウス座に連れて行つたんだ」

「……どうでもいいわよ、そんなこと」

「これは心外。プリマの方から聞いてきたんだらう」

「貴方が何人の貴族のご婦人をたぶらかしていようと、どうでもいいと言つたの」

「貴族だけに傾倒しているつもりはないが」

それこそどうでもいいことだったので、フェリアは無視すること

に決めた。再び彼女が無言になったのを受けてさすがに悪ふざけが過ぎたと思ったのか、ナイザーは意地の悪い笑みを隠す。彼は癖のある茶の髪を自分で撫でながら目を細めた。

「??今のラウグリアはどう傾くか、全く先が見えんからな。少しでも人脈を広げておきたいものだ」

貴族の女と遊び歩いていることを何の恥もなく吐露しておきながら、急にしおらしく言うものだから、覚えるのは違和感ばかりだ。

「……それが女遊びの大義名分？」

「まあ、そんなところだ」

「女を使つて准尉までのぼりつめたとでも？」

「否定は出来ないな」

ナイザーの面に食えない笑みが戻ってくる。思わずフェリアが表情を険しくさせると「冗談だ」とすぐに弁明した。それでもあながち冗談に思えないのは、ふざけた人柄の所為だろう。ベーラから聞いた「オレーク・ナイザー」という人物は、この世に二人としない傑物という印象だった。軍人なら誰でもその名を知っているというのだから、あながち間違つてはおるまい。だが、この男のどこから傑然たる所以を見出せばいいのだろう。

フェリアがぼんやりと悩んでいると、ふとナイザーが唸りをあげた。続けて吐き出した声は低い。

「ラウグリア国の民は、自分がいかに恵まれているのかを何故か納得できていない」

今までになく真面目な声色に、むしろ気味の悪いものを感じる。

フェリアが首を傾げると、ナイザーは試すような視線を投げかけてきた。

「お前は、そもそも何故この戦争が始まったか知っているか？」

「……知らないわ。今から十年以上も前のことじゃない」

「そうだな、今から十三年前のことだ」

十三年前のあの日、フェリアの父は兵卒になると言って姿を眩ました。フェリアには、この戦争の意味などどうでもよかった。とに

かく父が戻ってくれば、それでよかった。

「北国ラウグリアは、東国ヤンムを占拠する戦を始めた。何故なら、東国ヤンムはラウグリアと違って冬が短い。北国は実り豊かな土地を欲しがった。そして十年かけて東を征服し、今度は西国エウリアを配下に置かんとして戦っている。理由は、東に戦いを吹っつけた時と同じだろうな」

しかし、とナイザーは顎を引いた。彼の目の色が変わる。それはフェリアがかつて劇場の舞台から見た物と同じで、殺気すら感じられるほどの鋭い覇気を帯びている。彼女は思わず身震いしそうになるのを、必死で押しとどめた。

「???しかし、東が本当に豊かな土地ならば、何故、東西南北四力国の中で最も貧しい国と言われているのか。北は冬こそ長いが、英知に恵まれている。西国のように宗教に頼らずとも何百年も巨大な国家を支えてこられたのは、人間の考えが発達していたからだ。?それに、北国には獣人がいない」

「獣人……?」

「お前はそれも知らないのか」

呆れたように吐き捨てられてむっとするが、知らないものは仕方がない。フェリアが口を噤むと、ナイザーはため息をついた。

「獣人。西国では人畜とも呼ぶらしいが、俺たちは獣人と言っな。人の子として生まれるが、成長するに連れて巨大な化け物になっていく生き物だ」

「……まさか」

「信じられんのも無理はない。何故か、北では生まれてこないからな。かと言って南に行けば行くほど多いかと言えばそういうわけでもないらしい。獣人の出生率が最も高いのは東国だ」

「人間が、化け物を生むの……?」

「端的に言えばそういうことになる。どういう原理なのか未だにわからないが、生むまで親にもわからない。しかも、幼い時には人の形をしているというから尚更厄介なんだ」

フェリアは想像出来ずに、ただただぼかんとした。

「東国の発展が遅れているのは、この獣人の影響だと俺は思っている。成長してしまえばただの獣でしかないから、人には扱えない。ゆえに人は獣人を殺すが、大抵の親は情が移って殺せず、山奥に捨てるか自分の方が子供に殺されちまう。そして野生化した獣人が山奥や森に溢れるわけだな。東では、こんな風に夜中の山奥で馬車を無防備に走らせることなど出来ないそうぞ」

言葉を失ったフェリアに苦笑し、ナイザーは馬車の小窓に肘を突いた。月明かりと前灯だけで暗い山道を走れるほど、北国ラウグリアは恵まれているのである。

「……それなのに、ラウグリアが戦に暴走しているのは、『力』があるからだろうな」

「力」という単語に妙な気迫があり、フェリアは不思議に思ったが、これ以上物知らずだと思われなくなかったため、疑問を飲み込んだ。そういえば、スールイ公も妙にフェリアには「力」があると繰り返した。それとこれとが関係あるのかないのかさえ、フェリアには判断できない。

「……あんだだつて軍人じゃない。国を戦に走らせている一員よ」
誤魔化すように憎まれ口を叩いた。そうすれば、ナイザーが先刻までのようなふざけた調子を取り戻すと思ったのだ。しかし、彼は「そうだな」と低い声色で呟いたきり、閉口してしまった。月夜を眺めて、こちらを見ようとしてもしない。

？？本当に、奇妙な男である。

准尉という立場にありながら自国の体勢を批判し、しかもそれを初対面のプリマドンナに向かってばやく。腹の立つほどふざけているかと思えば、気味の悪いほどに真面目腐る。

ぱかぱかと軽快に馬の闊歩する音が、夜道の静寂の中へ響き渡った。そろそろ山を越え、都の見えてくる頃合である。

それから後もずっと、馬車の中は静寂に包まれていた。

5、殺意にもよく似た

グロピウス座で新しい演目が始まる。

その知らせは都中へと瞬く間に広がり、おかげで劇場は初日から連日満席となった。役者はリハーサルと本番の繰り返しに日々休む暇もない。彼女たちの健康を考慮し、グロピウスは新しい演目が始まってから一月は客から役者へのアプローチは贈り物のみとし、面会を禁じた。それでも多忙であることに変わりはない。特に、出番の多いプリマドンナには席の暖まる暇もない。夜の時間を客に取られるだけで済んだかつての生活がどんなに楽であったかと骨身に染みていた。男と過ごすなら、適当に頷いていればいい。しかしながら、自分が舞台に立って歌う時には絶えず気を張っていないくてはならない。十日目の舞台を迎える頃には、疲弊しきっていた。

リハーサルが終わり、本番はあと二時間と迫っている。舞台監督から出される終了の合図に、自ずと安堵の息が漏れた。ようやく与えられた休憩に、フェリアは縋りつく。楽屋へなだれ込むように戻ると、部屋の端にぽつんと置かれたソファーへと飛び込んだ。楽屋の中にはまだ誰もいない。無音の心地よさと柔らかな背もたれの感触に、意識が飛びそうになる。まだ本番までは二時間あるのだし仮眠でもとろうかと目を瞑りながらも思考していると、不意にソファーが沈んだ。いつのまに楽屋へ入ってきたのだろう、誰かが隣に腰掛けたりしい。

「大丈夫？ 死体みたいな顔よ」

天下のプリマドンナにこんな口が利ける人物など限られている。フェリアは隣で涼しい顔をしている黒髪の美女をまじまじと見つめた。

「この過酷なスケジュールこなしてりやそうなるわよ……。ベーラはなんでそんなに平静なの？ 本当に人間？」

「両親ともに人間だったわ」

ベーラ特有の言い回しに辟易する。彼女は人間の子は人間であるという常識を指して言っているのだろうが、フェリアの中にひよつと悪戯心が湧いた。そのまま思いついたことを口にしてみる。

「人間が、獣を生むこともあるらしいけど？」

滅多に取り乱すことのないベーラも、これにはさすがに吃驚するだろうと期待したが、彼女は相変わらずあっけらかんとしていた。

「ああ、獣人でしょう？」

こつも簡単に切り返されてしまうと面白くない。半ば不貞腐れて、フェリアはそっぽを向いた。

「どうして、ベーラはなんでも知ってるの」

「面会する男から聞くからよ。知識を乞うと喜ぶ男は多いわよ？特に軍人にはね」

ベーラは、アンナとは違った意味で好奇心が旺盛だった。アンナが男女の色めいた話について興味を持つのに対して、ベーラは世情を知りたがる。そしてフェリアは、そのどちらにも興味がなかったゆえに、あの気に食わない男に「そんなことも知らないのか」と無知を馬鹿にされるわけである。

「私達ただの役者よ？ 別に知らなくなっただけでいいじゃない、そんなこと……」

「知ってて損することはないわ。得することはあってもね」

最後の負け惜しみすら安易に切り捨てられて、すっかりフェリアはむくれた。ベーラはいつものことだと言わんばかりに平然としている。この二人の会話はこのように知りきれトンボになることが多い。だが話したいことは充分話したという満足は両者にあるため、その後に続く沈黙は特に不快でなかった。

他の出演者たちはそれぞれ劇場の隣に建てられた宿舎に戻って休息しているのだろうか。この建物の中には他に誰もいないような静けさの中に、二人は身を任せる。再び眠気が訪れて、フェリアがのんびりとソファーに身を沈めると、何者かが突如けたたましい音と

ともに楽屋に飛び込んできた。誰も彼もが疲れきっている中で、これだけの活力があるのは彼女くらいのものではないか。そうフェリアがうんざりしたのも束の間、頬を紅潮させ目を輝かせているアンナが、フェリアの名を高らかに呼んだ。

「フェリアっ！ 例の軍人さん、また来てるわっ」

「は……」

「ナイザー准尉よ、准尉……！ 彼、准尉なんですって！ かつこいいわよねー！」

アンナはよほど気分が高揚しているのか、胸の前で手を組むとくるくるその場でターンした。ひらりと舞い上がる彼女のドレスの裾を見つつ、フェリアはこっそり眉をひそめる。ナイザーという音の響きが、一瞬で彼女を憂鬱にさせた。

あれから幾度か、この劇場内にて彼の姿を見かけることがあった。しかし彼はこの劇場に足を運びながらも、フェリアをはじめ他の出演者たちにも一切興味の無いようだった。大抵は女連れで現われ、劇を鑑賞するだけでまっすぐ帰ってしまう。それ自体は悪いことでも何でもないはずなのに、何故だか気に入らなかった。

また、どこぞの貴族の女と一緒に鑑賞に来たのだらうとフェリアが心中でばやくと、まるでそれに反応したかのようにアンナがぱちんと手を叩いた。

「今日は珍しく一人だったのよ、彼！ だからちよつと表に出て、会話してきちゃった……！」

アンナがぺろりと舌先を見せた。フェリアは目を丸くする。彼が一人で此処まで足を運んだことにも驚いたが、何よりアンナがそこまでして彼と接近していることに愕然としていた。相手は毎度違う女を連れて劇を鑑賞に来るような遊び人である。アンナとて決して男に困るような立場ではないはずなのに、何ゆえそこまであ的好い加減な軍人に固執するのか。

そう思つての反応だったのだが、フェリアの陰しい顔を見て、アンナはきよんとしていた。よく考えてみれば、アンナが彼に接近

したからと言ってフェリアが衝撃を受けるのは実に奇妙な話である。フェリアはアンナはおるかベーラにも、ナイザーと馬車に同乗した話をしていなかった。ナイザーとの間に不覚にも面識が出来てしまったことを、フェリアの友人たちは知らないのである。それなのに彼女が過剰に反応するのは面妖であることこの上ない。

「……アンナったら、また練習抜け出したのね！」

フェリアは慌ててその場を繕った。隣に座る親友の方を誤魔化せたかどうかは際どいが、少なくともアンナにはそれで十分誤摩化せたようである。少女は納得したような表情を浮かべた後、やんちゃに微笑んだ。

「違うわあ、私フェリアたちよりちょっと休憩早くもらったんだもの！」

「それでも、今は面会禁止の時期なのに。グロピウスが怒るわよ」

「バレなきや大丈夫よ」

アンナは無邪気に笑っている。わずかな休憩時間さえ削り、劇団主の目を盗んでまで男に会いに行こうと思うのは若さゆえか、あるいは性格か。

「普通、そこまでする……？」

「だって、今しか機会がないと思ったし……彼、本当にかっこいいんだもん！　そう思わない、ベーラ？」

「別に」

ベーラは心底興味なさそうに即答した。ベーラは色恋沙汰に関して妙に冷めている。付き合いの長いフェリアですら、一人の男に固執しているベーラを見たことはなかった。??それは、フェリアの言えたことではないのだけれども。

「そっかあ。まあ、ベーラの好みじゃなさそうだもんね……フェリアは？」

まさか自分に話を振られると思っていなかったフェリアは一瞬固まった。咄嗟にどう答えていいかわからずに、目線が泳ぐ。しかし、あの気に食わない男を格好良いなどとはとても形容できそうになく

て、力強く下方をにらみつけた。

「別に。ただの、軍人じゃない」

「相変わらず、フェリアは軍人が嫌いね……」

アンナが困ったように首をすくめた。軍人だからってみんな悪い人じゃないのよと彼女は言うが、フェリアは顔をしかめただけだった。こればかりは幼い頃潜在的に埋め込まれた意識なので、フェリア自身にもどうしようもない。

アンナは諦めたような仕草を見ると、二人の前にちょこんとしゃがみこんだ。そして、ソファーに座る先輩たちを見上げる。

「じゃあ、私本気でアプローチしちゃっていいってことよね？」

無邪気な、きらきらと輝く、罪のない瞳。

その言葉を聞いた瞬間、何故かフェリアの胸のう치가激しく波打った。

隣の親友は「いいんじゃない？」と面倒くさそうに対応している。フェリアも乗り遅れてはいけないと慌ててそれに同調したが、波打つ心臓を止めることは出来なかった。

あんな男はやめた方がいい。後悔する。いろいろと安っぽい言葉が頭を過ぎり、そのまま素通りしていく。心の中にもやもやと得体の知れないわだかまりが浮かんで消え、消えては再び浮かぶ。その正体はフェリアにも不明である。

アンナは「やった！」と悪戯っぽく笑うと、足取り軽く部屋を出て行った。フェリアは複雑な心境のまま、ただただ床を睨みつけていた。

気付けば、本番まであと一時間を切っていた。余計な話をしていたために仮眠をとる時間もなくなってしまったらしい。

フェリアは溜息を落とした。あんな男に酔いしれるアンナの心がわからない。自分の心に浮かぶわだかまりのこともよくわからない。だが、おそらくあの男が全て悪いのだ。可哀想なアンナが振り回されているのも、自分の心が穏やかでないのも、こんなに体が疲弊しきっているのも、それなのに仮眠時間がなくなってしまったことも、

全てあの男のせいだ。フェリアは心の中で毒付いた。それが八つ当たりであることに、彼女は気付いていない。

空に銀鉤の月が浮かんでいる。表通りならば活気もあり道を照らす明かりもあるうが、建物を一つ挟んだ裏側には、心許ない月明かりしか光源が存在しなかった。

その日の演目が終わると、フェリアは着替えもせずに劇場の裏へと回った。裏門に続く湿っぽい道には、ほとんど誰にも使われていない鉄のベンチが放置されている。隣の宿舎と接近しているその狭い空間には、ベンチを一つ置くのが精一杯で他には何も無い。日当たりは悪く草木も生えないため、余計に陰湿な雰囲気をかもしだしていた。

今頃楽屋の中は着替えたり化粧を落としたりする女たちで溢れかえっていることだろう。常であればフェリアもそこに混ざっているのだが、今日はあの混雑の中で後始末をしたくなかった。少し待てば空くだろうと見越して、しばらく楽屋からも離れた劇場の裏側で休憩することにしたのである。

予想した通り路地には人っ子一人いなかった。フェリアは衣装の裾に泥が跳ねないようにとスカートを持ち上げる。石の道を通って鉄のベンチの前まで行くと腰掛けた。布越しでもひんやりと冷たい感触は、あつという間に体温と同化していく。酷い倦怠感により脳が活性せず、フェリアはぼんやり虚空を見つめた。

考えなくてはいけないことがたくさんある。例えば、スールイ公に西へ行くことと誘われたことや、可愛い妹分であるアンナのこと。また、考えたいこともたくさんある。明日の舞台へ向けての自分なりの反省点や、いかにして親友ベアラとの口争いに勝つかなどだ。だが、頭が働かない。無意識に口を開くと、歌が溢れた。彼女にとって歌うことは息をするのに等しく自然な動作なのである。人前で歌うためだけにこの声は存在しているわけではないと教えてくれたのは誰であつたか。

「?? お前の歌は人を救う。」

かつてそう言ったのは、フェリアの父ラドレッサだった。ただ歌うだけという動作の中にかなる救いがあるのかフェリアは未だに答えを見つけ出せてはいないが、実際に彼女の歌を聞いて「救われた」と口にする者は少なくなかった。誰もが彼女の歌に恍惚と聞き惚れる。?? あのを男を除いて。

今宵の舞台の上から見ても、ナイザーの姿はやけに目立っていた。他の客の全てがフェリアの歌を聴いている時に、彼だけはフェリア自身をまっすぐ見捕える。鋭い視線に貫かれるような気がして、どうにも落ち着かない。そのせいでフェリアは二、三個ミスをしていた。劇全体に関わるほどの大きな過ちでなかったから良かったものの、客からの視線に気が散ってミスをするなどという屈辱は初めてであった。その原因がああ男だということがさらに、腹立たしい。

フェリアは心に渦巻く恨み言が口から出て行かぬようにと歌を止めた。彼女は始めた歌は歌い上げると自分の中で決めており、滅多に途中でやめることはなかったが、今ならば不自然に消えていく旋律を聴いている者は自分以外にはおるまい。と、油断していたため、不意に路地の奥の物陰から響いた声に仰天した。

「?? やめてしまうのか？」

全く予測していなかったために、自ずと体が震えた。声の発生源を探して右へ左へと頭を巡らせていると、くくと厭味な笑い声がする。同時に、建物の設計の誤りで出来てしまったような小さな隙間から、男が出てきた。

「ただでプリマの歌が聞けるとは儲けものだと言っていたのだが」

丁度頭に思い描いていた相手だっただけに、動揺を隠せない。

「淮尉…… どうしてこんなところに？」

だが、それ以上にこの路地裏に潜んでいたことに驚愕していた。劇団の者さえないと思っていたのだから、当然のことである。そもそも、此処はグロピウス座の私有地だ。どうやって入ってきたのだろう。

「……今は、面会禁止の時期よ。それに、劇場の裏側への一般人の立ち入りは禁止されてるはずだけど」

「そのようだな。それでもプリマに会いたいという男たちが、裏門の前にうじゃうじゃとたむろしている。さすがにプリマドンナの人氣は著しい」

かけらの誠意も見えない応対に、苛立ちが募る。フェリアは自分の胸の内を落着けながら平常心を失うまいと、緩やかに足を組んだ。これ以上この男のペースに巻き込まれるのは御免である。あくまで、自分はプリマとしての余裕を保たなくてはならない。

「?? 准尉も私がお目当て?」

「俺が?」

「わざわざ劇場の私有地まで忍び込んだりして。そこまで熱意のあるお客様は初めてよ」

「おや、意外だな。度々あるのかと思っていたが」

「まさか。貴方が第一号よ」

「それは期待を裏切つて申し訳ないな」

「期待ですって……?」

「残念ながら、今日はプリマがお目当てではない。生憎、女に不足はしていないもので」

「……そうでしょうね。じゃあ今日は何? どこかの貴族のお嬢様に劇場の裏側を視察してこいとも懇願されたのかしら?」

「今日は一人できたんだよ。君の元のソプラノ歌手から熱烈な誘いを受けてね。こっそり中へ入れてもらったわけさ」

「まあ……」

アプローチすると断言したアンナの姿が脳裏に蘇った。彼女の行動力の旺盛さには呆れるばかりである。フェリアが注意しようとも直らず、グロピウスが叱ろうとも反省しないのは、本人にその気がないためだろう。フェリアは頭を抱え込みたくなった。

「……で、そのアンナは?」

中まで侵入できた経緯はわかったが、肝心の犯人が見えない。訝

るような視線を向けると、ナイザーも困惑したような表情を見せた。

「終幕してすぐに裏門から入れてもらったのはいいが、しばらくしたら裏門の前にプリマのファンが集まってしまつてな。出ようにも出られんのだ。彼女が他の出口を探しに行つてくれている」

裏門以外の出口は、表の正門かも知しくは丁稚がゴミの出し入れなどに使う小さな木戸しかない。正門から出るわけにはいかないだろうし、アンナはゴミ出し用の木戸の様子を見に行ったのだろう。汚らしい木戸をくぐつてこそそと出て行くナイザーの姿を想像し、フェリアは思わず笑つてしまった。なんとも間抜けな風体である。これで少しは溜飲も下がるというものだ。

「准尉ともあろう方が、ざまあないわね。ご愁傷様」

「何、おかげで劇場の裏を見ろという貴重な経験をさせてもらったし、プリマの鼻歌を拝聴できたからな。安いものだ」

皮肉は安々と受け流される。ますますフェリアの機嫌が傾いていくのを知りながら、男は屈託なく笑つた。結局、フェリアは彼の調子に飲み込まれていく。自分の意思でなく相手の都合の良いようにもてあそばれるのは望むところではなかった。負けるまい、とフェリアは毅然とした態度を固持し続ける。腕を組んで壁際を睨み上げると、面白そうに歪められたナイザーの目と視線がかち合った。

「……女には不足していないんでしょう？ それなのにアンナに手を出す必要はないんじゃないやなくて？」

「おいおい、勘違いしてくれるなよ。手を出したのは向こうだ。俺はその手を取つたまで」

「同じことよ。軽はずみな気持ちなら近付かないでと言つてるの」
「おや、プリマが怪気か？」

「ふざけないで！ あの子に本気なの、そうじゃないの？」

「可愛い女だと思うよ。俺には勿体無いくらいだ」

「それ、答えになってないわ！」

フェリアは息巻いて、立ち上がった。そこまで向きになる必要は

ないだろうにと呆れる心がある一方で、怒りを止めることも出来ない。ナイザーはこちらを見て興味深そうに微笑むのみである。その態度が彼女の神経をますます逆撫でしていく。

激昂し、何かを甲高く叫ぼうと口を開いたその時、ナイザーの後ろ側より小さな影が飛び出してきた。

「准尉……！」

暗く湿った空間の中でも、明るく爽やかさを失わない少女の声である。目映いほどの笑顔を称えて現れた少女は、そこにフェリアの姿を見つけると、小首を傾げた。

「あれ、フェリア……？」

フェリアは思わず、アンナから視線を逸らした。自分には関係のないことなのに、必要以上に熱くなってしまったと反省する。他人の口出しするところではない。アンナの問題なのだから、彼女が解決すればいいのだ。

「……出口は見つかったかい？」

きょとんとしていたアンナであるが、ナイザーに声をかけられるとすぐに目映さを取り戻した。自分より幾分も背の高い相手を見上げてにつこりと微笑んでいる。

「ええ……！ 汚らしい木戸になってしまつて、申し訳ないんですけれども……」

「構わんよ。それもまた一興」

「准尉はご寛恕の深い方ね、本当に……！」

アンナは嬉々としてナイザーを連れ木戸の方へと向かつていった。ナイザーもそれに従い、二人はフェリアの方を振り返ろうとしないう。その姿が建物の角を曲がって見えなくなると、取り残されたフェリアはずんと重たくなる頭を片手で支えた。首をぐったりとうな垂れると、足元がふと目に映る。あれほど気をつけていた衣装の裾が、泥に濡れていた。我を失って激昂などしたからである。

フェリアは首を横に振った。自分はどうかしてしまつたのではないだろうか。調子が狂っている。これは、いつもの自分ではない。

（楽屋へ、戻ろう）

かなり時間は経ったはずである。今戻れば楽屋もすっきりしているだろう。

休憩をしに此処まで出てきたはずだったのに、疲労は溜まっていっぱかりであった。肩が重い。だが、何より頭が痛い。熱でもあるのだろうかと思つて額に手を当ててみたが、特に異常は見られなかった。

まっすぐに目的地を向かうと、期待した以上に空いていた。残されているのは脱ぎ捨てられた衣装ばかりで、人影はない。着替えが済むなり、皆寢床へ戻ってしまったのだろう。それぞれ連日の舞台とリハーサルに疲れているだろうから、無理もなかった。

フェアリアは化粧台の一つを選んで椅子を引くと、腰を下ろした。ゆらゆらと燭台の上の灯が揺れている。目の前にどんと聳え立つ鏡台の前に肘をつくとき、己の姿がその灯の色に染められていた。花のようなかんばせと言われるその顔が、目の前には鮮明に映し出されている。

??お母上によく似て美しい。

そう評されるこの顔を、フェアリアはどうしても好きになれなかった。確かにこの顔のために得をすることもあることは認めるが、だからと言ってあの女のことを思い出さずにおれないこの顔をどうして好きになれよう。フェアリアの記憶の中の母親の面影はひどく不鮮明であつた。そのため、彼女の思い描く母親は、自分と同じ顔をしている。

民衆に天女のようなと言われて愛されていた母は、心優しい若き青年作曲家をたぶらかした。彼を、騙して捨てたのだ。父と母が一緒にいた期間はわずか数ヶ月だったという。父はその間に母に一生の愛を誓い、だが、母は父に別れを告げることすらなく蒸発した。父の手元に残されたのは、生まれたばかりの娘と白く細い花束だけだったという。母は子供の面倒の一切を男に押し付け、その手向けとばかりに花束を一つ置いていった。そしてそれきり二度と、姿を

現さなかった。自らに必要なものとして、廃棄したのだ。

しかし、そんなことをされても、父は母を愛することを誓い続けた。自分の前にはいない相手を愛することはどんなに苦痛だったろう。そして最後には、戦火の中へと自ら身を投じて、消えてしまった。

「フェリア」

名前を呼ばれて、フェリアは顔を上げた。いつの間に戻ってきたのだろう、鏡越しにアンナが覗き込んできていた。

「??どうしたの、怖い顔して」

無邪気に首をかしげている少女には、悪気もなければからかいの気持ちもない。おそらく自分は恐ろしく冷淡な形相をしていたのだろうなと思って、フェリアは頬を掌で撫でた。

「……疲れてるみたい」

「毎日働きっぱなしだものね」

フェリアの隣に腰を下ろしたアンナは、鏡に向かって白粉を落と始めた。化粧落とし特有の鼻に通る臭いがする。フェリアは自分もまだ何の始末もしていないことを思い出して、アンナと同じ薬品を手にとった。

「アンナは、元気ね……」

「恋する乙女が疲れている顔を見せるわけにはいかないでしょ？」

「恋……」

恥ずかしげもなく吐き出された言葉にこちらの方がうんざりとしてしまう。フェリアは布で顔を拭く動作をふと止め、手を台の上に置いた。先刻のアンナの様子と、ナイザーの無情な台詞たちが次々に頭の中に蘇る。頭痛がますます酷くなりそうだ。

「……本気なの？」

恐る恐る問いかけると、

「もちろん」

何の恐れもない答えが返ってきた。フェリアの中を、複雑怪奇にさまざまな感情が駆け巡っていく。自分でも整理できない流星のよ

うな感情たちをなんとか押しとどめようと布を持ったまま拳を握り締めれば、布に浸した薬品が指の合間から滴り落ちていった。

「やめた方がいいわ」

咄嗟に口をついて出た言葉に、我ながら驚いていた。

「アンナのためにならないもの」

?? 私は何を言っているのだろう。

フェリア自身にも理解できない感情が言葉になって溢れていく。自分で自分を傍観しているような気分になった。まるで体の中に自分が二人いるようだ。

隣にいる少女もフェリアの突然の苦言にきよんとしていた。

「……………どうして？」

「愛なんて、所詮まやかでしょう？」

「フェリア」

「何をどうしたって、実体はないのよ。見えない何かに翻弄されて、傷つくことがあっても得られる物なんて何もないの」

「フェリア……そんな悲しいことを言わないで」

「悲しいことなんて何もないわ。私は真実を言ってるだけよ」

「でも、すごく悲しそうよ、フェリア」

「私が……？」

自分を指差し首を傾げると、アンナは小さく頷いた。

目の前の鏡に映る自分は、そんなに悲愴な顔をしているようには見えない。だが、何かを思いつめていた。まるで何者かに追われているように、焦っている。

「フェリアも、恋をした方がいいわ」

「恋？ 私……？」

「ええ。そしたらきっと、そんなこと思わなくなる。絶対よ」

アンナは力強く断言した。彼女は幸せそうに微笑むと、再び鏡へと向かった。その幸福そうな面差しは、フェリアには決して真似できない物である。?? 眩しいのである。晴れ渡る夏の日に、肉眼で太陽を仰ぐような苦痛を感じてしまう。目が眩み、しばし言葉もな

くす。

フェリアには、アンナが日常的に語る「愛」というものがさっぱりわからない。これが愛なのだと信じられる物など何一つなかった。

フェリアに言い寄ってくる男たちは、舞台の上で歌うプリマドンナとしてのフェリアに幻想を抱いている。フェリアはそれを瓦解させることなく演じきり、そこに愛の生まれようはずもなかった。

フェリアの母は誰のことも愛さなかった。人々に慕われる身でありながら、己は誰にも手を差し伸べなかった。一度は伴侶になった男にすら、そして自分の娘にさえも。

そしてそんな母を十年かけて追いかけた父の姿にも、フェリアは愛を感じるなどできなかった。彼は母を追うために命を削り、十年も苦しみ続けたのだ。それは愛というより、呪縛である。彼女を愛し続けると誓った彼の心は、単なる呪詛でしかない。

人は何の目的か、恋をする。それはやがて呪縛となりその人間を殺してしまう。心を引き裂き、肉体を衰えさせやがては死に至る呪いだ。??ならばそんなもの、最初からなくしてしまえばいいのだ。愛など存在しないと声高らかに言い切ってしまう方がいい。

フェリアはそう固く信じていた。そのはずだった。

それなのに、時折明るく輝くアンナを羨ましく思うのは矛盾しているのではないだろうか。彼女のことを眩しいと思い、彼女からは悲しそうな顔をしていると言われる。どうして存在しないものに縋る彼女を羨み、存在しないものを切り捨てた自分が悲しげに映るのだろう。

フェリアは手に握り締めていた布を、台の上に置いた。その上に腕を組み、額を乗せる。唐突に机に突っ伏したフェリアを「大丈夫

？」とアンナが氣遣ってくれたが、大丈夫と返す余裕がなかった。つまり、大丈夫ではなかった。

酷く頭が重い。内側から外へと響くような頭痛がする。間々思い出される男の顔が、憎くて仕方ない。忘れてしまえばいいのに、どうしてわざわざ思い出してまで憎む必要があるのだろう。

??いつそ、一思いに殺してやりたい。

この時フェリアは初めて他人に殺意を抱いた。あれだけ恨んでいた母親にさえ、芽生えなかった激情を生まれて初めて経験した。

これがわだかまりの正体だったのだ、とフェリアは自分なりに結論付ける。二十年生きてきて、こんな感情を抱いたのは初めてなのだ。突然現われたあの男に、何もかもを奪われてしまう気がする。

??私は、あの男を殺してしまいたいほど憎んでいる。

誰もが花のようなかんばせだと称したその顔に、修羅の影が映った。

6、踊り子ペーラの暇つぶし

その日の北国ラウグリアには、珍しいほどの篠付く雨が降っていた。

雨の下、首都エルヴァを闊歩する男がいる。男は、若い娘と逢瀬を繰り替えていた。娘と会っては愛の抱擁をし、抱擁をした後に愛の囁きとともに白い花束を贈る。白い花束を受け取った娘は恍惚とした眼差しで花を見つめ、やがて男と別れた。別れた男は次の娘との逢瀬のために、雨の中を移動した。

男は幾度も幾度も逢瀬を繰り返す。彼は、よもや自分が誰かに睨みつけられていようとは、夢にも思わなかった。そして男を睨みつけていた女は、やがて我慢ならなくなったのか、男を追って雨の中へと飛び出した。人知れず、冷たい雨の中での鬼事が始まった。

さて、そんな女たらしの男のことも、鬼事を繰り広げる女のことも知らないペーラは、自分の所属するグロピウス座の劇場の窓から、雨の降りしきる首都エルヴァの街を眺めていた。

新しい演目が始まってから一月が経ち、本番とりハーサルを繰り返す生活はひとまず終わった。面会禁止も解かれ、劇場では平坦な日々が続いている。そろそろ季節は秋に変わり、まだ残暑が厳しいとは言え雨が降ると途端に涼しくなった。もとよりラウグリアの夏はそう長くもなければ暑苦しくもない。そして冬が他の何処よりも長い。故に、戦が始まった。

ついに、ラウグリア軍は西の国境線を破ったという。戦場から隔離された首都エルヴァでは、そう有名な話ではない。平和ぼけた市民たちは自分の国の置かれている状況すら正確には知らないし、

知りたがらない。

その中で、ベーラは異端だったと言えよう。常に情報網を貼っている彼女の耳にはいつでも最新の情報が届けられていた。それでも軍が国境線を破ってから五日近く経っていたと言ったことから、いかにエルヴアが戦場から離れているのかよくわかる。

ベーラの情報網は、劇場を中心に外へと広がっていた。彼女は劇終了後の面会の相手を直感で決める。仲間はそれを不可思議だと笑うが、どれもこれも似たような物なのにそこから一つを選ぶ方がベーラにとっては不可思議に思えた。そうして出会った相手とは、とにかく世間話をし続けるような心にかけている。普段どちらかと言えば口数の少ないベーラが必死に話を紡いでいると知ったら、それこそ不可思議だと仲間たちは目を丸くするだろう。しかし、そうでもしなければ相手の握っている情報量は掴めない。つまり、ベーラは一晚語り明かせばその人間がどの方面にどれほどの広さ、あるいは深さで情報網を張っているか大方予測できた。そして使えると思った相手とはこまめに連絡を取り合うようにしている。

そうまでして彼女が情報を欲しがる理由は、特にはなかった。強いて言えば、暇だった。

ベーラは自分自身のことやその近辺のことにはさして興味がない代わりに、自分ひとりでは決して見ることの出来ないような世界の情勢を見渡すことを好んでいた。一度その楽しみを味わってしまうと、自分の周囲のことなどあまりにも小さくてどうしてもよくなってしまうのだ。

?? ついにラウグリアが、西の国境線を突破した。

その情報も、ある人にとってはこの上なくどうでもいいことかもしれないが、ベーラにとっては久しぶりに得た興味深い話題であっ

た。何しろ、ラウグリアが西国エウリアに攻め込んで約三年弱、東西南北の中で最も繁栄していると言われるエウリアの護りを崩すのは容易でなく、両者は国境辺りで膠着を続けていたのだから。

ラウグリアの国土面積は四力国の中でも最小で、総人口も最少であった。当然兵卒の数も少なく、東に続いて二番目に国土の広い西に武力で適うべくもないと思われる。その常識が、長い歴史の中で始めて覆されたのである。そして恐らくその勝因は、ラウグリアが軍国になりつつあることと、それでも軍が皇室を手放せない理由にあると思われる。

??ラウグリア国の皇室には、軍が自力では決して手に入れることの出来ない最強の武器が眠っているに違いない。

これは、ベーラの勘であった。軍人の知り合いは多いが、残念なことに皇室に係のある人間との関わりはない。軍人たちはほとんど国を単独で指揮しているようなものの、皇室のことは全くと言っていいほど知らなかった。あるいは知っていても、話せないのかもしれない。どちらにしても、王宮の中には何か隠し玉が眠っているはずだ。

ベーラは覚えず口元を緩ませた。戦を楽しむわけではないが、少なくともしばらくは退屈せずに済みそうである。劇場の正門が見える窓辺に寄りかかり、人知れず不適な笑みを浮かべた。

「ひどい雨だな」

不意に現れた中年の男が、ベーラの脇に立って外を見下ろした。窓に映った姿は、黒い正装姿である。劇場の中で働いている男は少なくないが、その中で気軽にトップダンサーに話しかけることが出来るのは、座長ただ一人であった。

ベーラは相手の顔を見上げるのが面倒だったので、彼の足元を一瞥する。決して安物ではないズボンの裾が、わずかだが雨水に濡れていた。

「このひどい雨の中、外にいたの？」

一目で言い当てられたことにグロピウスは面食らったようだった。ベーラがズボンの裾を示して種明かしをすると、「適わないな」と首をすくめる。そして茶目つ気たつぷりに目を細めた。

「裏門に、どうしてもプリマに会いたいと言って動かない男がいてな」

「会わせてあげればいいじゃない」

「そういうわけにいくまい。男がどんなに一方的に願っても、女の了承がなきゃ入れないのがうちの指針だ」

特にこだわりのないフェアリアなら、余程気分が乗らないという以外であれば、相手が誰であろうと了承するのではないかとベーラは思ったが、いちいち反論するのも面倒だったので適当に頷いておいた。

「てこでも動かんの、追い払った」

「座長自ら？」

「うちの女優は売女ではない、と一喝してきたよ」

自慢気に笑う座長を見上げ、すぐに窓の外を眺めた。雨が小道に小さな川を作っている。この分では今日の客数は普段の半分程度かもしれない。

「ところで、うちのプリマを見なかったか」

どうやら本題はそれらしい。グロピウスを含め、何かと皆はフェアリアの居場所をベーラに聞いてくるが、いくらベーラがフェアリアの親友だからと言って常にフェアリアの居場所を確認しているわけではない。「見てない」と短く答えると、グロピウスは困ったように「そうか」と呟いた。急用のようだ。

「……また、スールイ公がフェアリアをお呼びなの？」

グロピウスは片方の眉尻をくいと持ち上げた。

「何故、そう思う?」

「直感」

「……勘の良いことだ」

凶星だったようである。グロピウスはため息を交えながら、顎髭を撫でた。

「公爵が話を持ちかけてくるのはいつでも直前だから……なるべく早くフェリアに伝えたいんだが」

「うちの役者は売女ではないんじゃないの?」

すると、心外だと彼の顔が歪む。

「私はフェリアに強制してるつもりはない。それにいわゆる娼婦のような仕事をしているわけでもなし」

「そう。??でもグロピウスにとって、フェリアは売り物なんじゃないの?」

「何を言う」

「いつまであの子を此処に縛り付けるつもり?」

「どういうことだ」

「貴方、本当はフェリアのお父様がどうなったか知ってるんじゃないの?」

ベーラはグロピウスの目を覗き込んだ。彼は眉間に皺を寄せ、わずかだが身を後ろへ引く。

「……そんなわけないだろう。私には、ラドレッサが戻ってくるまであの子を此処で保護する義務がある」

「???そう」

ベーラは頓につまらなさそうに視線を外した。窓に額を押し付けて、それ以上は口を開かない。グロピウスも他に言いたいことはないらしく、口を閉ざしたまま窓辺を離れていった。

ベーラは滅多に表情が変わらない。??本人にそんなつもりはないのだが、周囲はそう口を揃える。??そのため、第三者がここにいたとしても、彼女の心情の変化には恐らく全く気付かなかっただ

ろう。だが、彼女は動転していた。

?? 実は、グロピウスはフェリアの父の行く末を知っているのではないか。

これはベーラにとってはほんの冗談のつもりであった。しかし、親友であるフェリアのよく言うように「ベーラの冗談は冗談に聞こえない」らしい。鎌をかけられたと勘違いしたグロピウスは、ほんの刹那のことであつたが、動揺を見せた。そしてそれをベーラは見逃さなかつた。

フェリアは、他の踊り子や歌手とは少し劇場での立場が異なつていた。ベーラを含め多くの女たちは身寄りがなかつたり、親に売られたりしてこの劇場に住み着く。彼女たちにとつては、ここが自分の家であり、他に帰る場所はない。だが、フェリアの場合は、座長と親しくしていた父親が、一時的に娘を預けただけのこと。おそらくフェリアの他の出演者たちへの態度に礼儀がないのはここに起因している。?? ベーラなどはそれが逆に心地良いのだが、多くの女たちには反感を買つていた。?? つまるところ、フェリアはいつもこの劇場を抜け出して構わないのである。彼女は父親を待つという名目で、此処にいるだけなのだ。

そして、グロピウスは、十年以上音沙汰一つなかつたフェリアの父の行く末を知っている。ベーラは先刻の一瞬で、確信した。

おそらく、音沙汰一つなかつたわけではないのだ。グロピウスが、父からの連絡を遮断していたに違いない。だとすればその内容いかんによつては、フェリアが此処にいる意味はなくなる。それどころか、此処を出て父に会いに行くことだつてできるかもしれないのだ。

ベーラは、自分自身のことやその近辺のことには滅多に興味を示さない。だが、今回は例外であった。多くのことに無関心であるとは言え、ベーラとてこの十数年フェリアがどれだけ父親の帰りを、連絡を心待ちにしていたか知らないはずがない。この件を見逃すわけにはいかなかった。

しかし、真実が鮮明には見えない今、あまり騒ぎ立てるのは望ましくない。特に、フェリア本人には伝えるべきではないだろう。正確な情報は人を混乱させるのみで何ら利益を与えない。

ベーラは重たい瞼をゆっくり持ち上げた。しばらくは世情よりもフェリアの父について中心に、情報収集に徹することを決意した。己の情報網ならば、どんな深部まで掘り下げていくことも可能だと自負している。

窓の外の雨脚は強くなっていく一方であった。この雨の中、渦中のプリマドンナが人知れず外出していたことなど、情報通のベーラですら知らない。

彼女は窓の外を滴り落ちる雫の痕を指先でなぞった。

真相を調べて突き止めるというのはどうしてこんなに面白いのだろう。

久方ぶりの胸がはずむような感覚に、彼女は一人微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8908x/>

北国のプリマ

2011年10月25日10時14分発行